

## 理由表現における話し手の主観性

ウィルカーソン高士京子

### 1. はじめに

「から」と「ので」の違いや「のだ」に関する研究が多い中、「ものだ」に関するものはあまり見られず、殆どのものが「ものだ」という形式を持つ文の意味、用法の羅列にとどまっている。又、外国人のための日本語文法の参考書や教科書では、「から」「ので」「もの」などのニュアンスの違いよりも、まず文法的に正しい発話が出来るようにと、「ので」の文末制限を中心に説明がされている。学習者にとって大切なことであるから、もっともだが、上級の学生には、何故「ので」を使うと「から」よりも丁寧に聞こえるのか、どうして「もので」を使うと「言い訳」や「甘え」に聞こえるのか、という所まで、触れられればよいと思う。

本稿では、文法研究の日本語教育への応用を考え、以下の2つの仮説を検証する。

#### 1) 「もの」の意義素

「物」というのは、もともと変動しない形のある物体を示していることから、具体的に物体を指さない「もの」という言葉は、「もの」を連体修飾している先行のS1の表す事柄と後行するS2との間に、そうなる又はそうなったのは当然だといった所謂因果関係のような物が成り立つという主張を名詞化し客体化する時に使われる。本来はS1とS2との間に経験に基づいた一般法則なり、日常の常識や行為を基準とした関係が成り立っているということを言い表わす。

#### 2) 理由表現としての「もの」

上記の「もの」の意義素からの派生で、日常の常識や行為を基準とした関係が成り立っているという前提を言い表わすことによって客観化を試み、正当化し、聞き手に了解させ、あるいは聞き手を説得する根拠を提示する時に使われる。たとえ話し手自身の感情や勝手な条件／理由であっても無理に客観化し、正当化しようとする時にも使われる。

### 2. 「ものだ」

「ものだ」に関する先行研究には主に二種類あり、一つは「もの」の多義構造、つまり種々の機能を分析したもの（靱山1990, 1991, 1992）で、もう一つは多義語「もの」の意義素の研究（高士1994、坪根1994）である。森田（1980:147）によると、本来「物」という言葉は、生成され消滅することもあるが、本来は変動しない形のある物体を示しており、感覚器官によって把握されるだけの固定した客観的な存在を指す。又「もの」を「こと」と区別する上で寺村(1992)や中村(1975)のように「こと」が一般的なものを指すのに対し、「もの」は個別的な物を指すと主張する人もいれば、大野(1974)や原田（1991）のように「もの」は不変的存在物だと主張する人もいる中、坪根（1994:8）は次のように定義している。これは高士(1994)とほぼ一致している。

「もの」とは個別的な特定の対象を指すのではなく、一般化された存在物である。それは時間軸とは関係なしに存在する。つまり、「不変的な一般存在である」と言える。

従って、自分の言っていることが「一般的にこうだ」と話し手自身が判断している場合や、もしくは、聞き手にそう判断してもらいたい場合に「もの」が使われる。従って自然の傾向、社会的慣習、常識、習性を踏まえた事柄を述べる時に用いられる。

定期的に繰り返して起こる出来事や状態を表し、話し手が自分の考えが一般的な概念だとか当然の帰結だと思っているとか聞き手にそう思わせたい時に現在形の活用語に「ものだ」をつける。

- (1) 一生というのは不備を生きることなんだ。それを彼は知っていたんだ。知っていても、普通の人間は自分がその不備を一身に受ける場合になると、それを不当だと言って叫び出すものなんだ。<sup>1)</sup>

「自分がその不備を一身に受ける場合になると」が条件にあたり、「もの」の手前に来る言葉がその結果と言える。又、先行文に条件が見られるものもある。兄が妹のことを、ホテルのような所でも、あたかも我家のごとく振る舞えるという特技を持っていると語っており、だから「こういう女性の言うことは、通ってしまう」のが一般的だと言っている。

- (2) こういう女性の言うことは、たいてい通ってしまうものだ。<sup>2)</sup>

(3)でも、先行文に、「はっきり嫌われているとわかりながら、あきらめぬことの出来ぬ女心が哀れであり、悲しいものに思えた。」というのがあり、当然ながらこんな哀れで悲しい恋はしたくないという気持ちを、「もの」という言葉を用いて表している。

- (3) 間違ってもこんな恋はしたくないものだ。

これは、話者の考えを表に出した願望表現、つまり話し手の主観にもかかわらず、聞き手に客観的な印象を与えようとして、「もの」を使っている。これは、あくまでも当然の願望で、一般的な考え方なのだと言っている。その証拠として、文頭に「私は」や「あなたは」のような主語を付けるとすわりが悪い。

又、(4)の様に過去の習慣や頻繁にあった事柄を懐しむ気持ちをこめて使う場合、過去、完了の助動詞「た」を受けて「ものだ」を使う。(4)の場合、殺人犯である話者が、捕まるのを恐れ、来客がある度に警察ではないかと脅えるのは当然だという話し手の心理状態を表している。「来客がある

---

<sup>1)</sup> 曾野綾子(1988:19)

<sup>2)</sup> 赤川次郎(1984:9)

度に」の「度に」からも分かるように、一回性のものではなく、「いつも」という一般性、繰り返しを意味している。

- (4) a. 毎日毎日、会社に来客がある度に、家の玄関のチャイムがなる度にぞっとしたものだよ。<sup>1)</sup>

(5) の用法は、普通、感慨を表す「ものだ」として知られているが、いくら糖尿だと言っても、「砂糖抜きでぜんざいなんて食べられるものじゃない」という本性、本質を表す文を裏返すことによって、驚きを表している。

- (5) いくら糖尿だからって、砂糖抜きでぜんざいなんて食べられるものだね。<sup>2)</sup>

既に起きた事柄、事件、状況などについて、その理由、背景、経過を説明、解説する「ものだ」がある。初山 (1992:30 注1) は、この種の「ものだ」を、他の「ものだ」との関連性が見られないことから、同音異義語としてとらえ、考察の対象から外している。坪根 (1994:24-25) も、これらの「もの」には「一般的にこうだ、ということ話し手の意思、判断として相手に訴えかける」要素はなく、かろうじて「もの」が前述された内容を指すことにより、結果的にその解説、説明となっていると述べている。つまり助動詞化していない形式名詞としての「もの」だと見なしている。しかし、既に起きた事件、現象、事態に至った原因、背後の事情とその結果を結び付ける「もの」の用法もあるのではないか。(6)では、「危機を乗り切るためには、タフで信任の厚い人を出馬させるものだ」という気持が背後にうかがえるし、(7)では、「女の役者出演が禁止されたら、自然とおやまの演技力が発達するものだ」というニュアンスがあるように思える。

- (6) ストラウス米大統領特使は十六日イスラエル入りし、四日間の中東訪問外交を開始する。米、イスラエル関係は最近パレスチナ解放機構の扱いなどをめぐって不調和音が目立っている。[中略] この危機を乗り切るため、タフで知られ、かつカーター大統領の信任の厚い「スーパー大使」ストラウス氏の出馬となったものだ。(朝日新聞 1979年8月)  
<sup>3)</sup>

- (7) (徳川幕府は) 女の役者の出演を禁止してしまったので、それ以後、やむをえず役者はすべて男ということになり、女に扮装する、いわゆる女形、おやまの演技が極度に洗練されて、かえって女ではとうていまねが出来ないほどの発達をとげたものです。<sup>4)</sup>

ここまで検証してきた因果関係を表す文では、結果の方に「もの」がついていた。以下「もの」

---

<sup>1)</sup> 赤川次郎(1984:23)

<sup>2)</sup> 森田、松木(1989:145, 158)

<sup>3)</sup> 寺村秀夫(1984:302)

<sup>4)</sup> 森田良行、松木正恵(1989:195)

が理由および原因の方についている文を検証する。いずれにせよ、「もの」の意義素が反映されているのは確かである。(8)では「学生は卒業したら姿が見えないものだ」という一般の傾向、(9)では「うそをつくなら、当然のことながら二度と口をきかない」という気持ちが打ち出されている。

(8) あの人はずもう卒業したものか、このごろ姿が見えません。<sup>1)</sup>

(9) 嘘をつこうものなら、二度と口をきかないぞ。<sup>2)</sup>

「ものの」は「のに」と同様、逆説的に用いられるが、これは歴史的に見ると、「もの」に付いている「の」は格助詞が発展したもので、体言に付き、逆説の「だが」の意味で使われたからである(此島1973)。(10)は「京都まで行ったら金閣寺へは行くものだ」という一般の傾向の裏返しだと見ることが出来る。

(10) 京都に行ったものの金閣寺へは行きませんでした。<sup>3)</sup>

### 3. 理由表現としての「もの」の拡張された用法 ---- 「もので」「～だもん」「～ですもの」

E. JordenのBeginning Japanese(1963:338)によると、「もの」は「から」のインフォーマルな表現で、英語の"because"に当たるとあるが、「もの」と「から」は決して同義ではなく、「もの」はあくまでも意義素を表しており、一語で理由、原因を表す「から」とはニュアンスが異なる。(11)からも分かるように、「もの」を使わずとも「てフォーム」のみで、時間の経過や理由を表すことが出来るため、「もの」という言葉自体が理由を表しているのではなく、意外な行動や状況に至った原因、またはその正当化を強調するのに使われ、「忙しいと、ついお電話するのを忘れてしまうものです。そうでしょうか?」という気持ちを相手に押しつけているのである。

(11) つい忙しかったもんで、お電話するのを忘れてしまいました。<sup>4)</sup>

(12) も同様、「初めて聞いたら、知らないものよ。そうでしょうか?」という話し手が当然だと感じていることを相手に押しつけることによって理由を表している。つまり、責任転化である。

(12) 「お父さんの話よ。一体何なのかしらね。」

「知らないわ。だって、空港で初めて聞いたんだもの。」<sup>5)</sup>

よく、思考の非論理性というか筋が通っていないと指摘され、何故そうなるのかと聞かれた場合、「だってそうなんだもん。」とは言っても「だってそうだから。」とは言わないことから「もの」

---

<sup>1)</sup> 名柄、中西、広田(1987:113)

<sup>2)</sup> 「外国人のための基本語用例辞典」(1984:1029)

<sup>3)</sup> 名柄、中西、広田(1987:114)

<sup>4)</sup> 「外国人のための基本語用例辞典」(1984:1029)

<sup>5)</sup> 赤川次郎(1984:9)

は主観的に因果関係を正当化するのに用いられることが分かる。また、子供が「～だもん」というのを頻繁に使うのも、子供は筋道を立てて物事を考えることに慣れていないからとも言えよう。

しかし、「もの」を連発すると、ただ正当化しようとしているというより、開き直っている印象を相手に与える場合もある。他人には理解しがたい議論であっても、本人は自分では筋が通っていると信じていたり、また無理に筋を通そうとして、くどい感じを与える。例えば、ビートたけしの「だから私は嫌われる」という現代の日本社会を徹底的に批判するエッセイ集の中で、自分の独断と偏見を「だもの」を連発しながら述べている(pp.14-15)。

こんな小さい国にあれだけの数のゴルフ場作っちゃってそれでやれって言うだもの、無理がある。練習場に二回しか行かないでコースに出ちゃったり。観光名所に行くのと同じ感覚だものね。それでゴルフと思っているんだから気にいらぬ。ゴルフをやりに行ったというより、新しい火山が噴火したんで見に行ったという感覚だもの。

ここで、「から」「ので」と比較しながら、「もの」の意義素、及び理由表現としての「もの」の果たす機能を更に検証する。牧野、筒井(1988)では、「から」は主観的な原因、理由を表し、「ので」は客観的な原因、理由を表すと説明している。一方、宮川(1990:104)は、「から」は話し手が観察した因果関係をただ単に現象(Phenomenon)として描写しているのに対し、「ので」は因果関係をコミュニティー共通の知識として述べていると論じている。つまり、(13)では、ただ単に母の日にカーネーションをあげたことを報告しているのに対し、(14)では、花子は母の日には普通赤いカーネーション贈るという習慣に基づいてしたことを描写している。宮川は「から」で示された知識を"Phenomenal Knowledge"とし、「ので」で示された知識を"Structural Knowledge"と呼び、区別している。

(13) 花子は母の日だから赤いカーネーションをあげた。

(14) 花子は母の日ので赤いカーネーションをあげた。

つまり、本来別個のものである二つの事柄を話し手が理由---結果の関係としてただ単に結び付けている場合は「から」を用いる。従って、确实性に乏しい条件であっても条件化し「から」の前に持ってくる事が出来、「... だろうから / ... まいから / ... たいから」という言い方も出来る。又、因果関係をただ単に描写しているだけなので、「から」の後に来る結果の句で、命令や依頼、推量、意志、質問等、まだその事柄が実現していないとも言えるのである。

一方、「ので」によって結び付いた因果関係は、森田(1980:112)が言うように、「話し手の主観以前にすでに存在する」ものである。、コミュニティー共通の知識として存在するもので、結果に至った理由、原因が事実であり、それが聞き手にも明らかであり、分かって貰えるという場合に「ので」を使う。つまり、确实な因果関係を客観的に捉え叙述する条件形式なので、主観的判断、推量、意志を表す「... だろうので / ... まいので / ... たいので」等とは言わないし、後続句で命令、忠告、質問、依頼、勧誘、要求等を述べることは少ない。又「ので」と同様、相手にある行為を納得させ、促すために、その条件を提示する場合は「もので」は使えず、「から」を用いなければならない

らない。

(15) 御馳走するから/\*ので/\*もので、新しいレストラン行ってみようよ。

しかし、以上の説明だけでは不十分である。例えば、主観的な理由にもかかわらず、「ので」が次の様な勧誘、依頼、意向のあらたまった表現によく用いられる。

(16) あまり時間がないので急ぎましょう。(勧誘)<sup>1)</sup>

(17) 新居に引っ越しましたので、お近くにお越しの際は是非一度お立ち寄り下さい。(依頼)

(18) 明日出張から帰りますので、夕方にでも電話でご都合を伺った上で、お宅へお邪魔したいと存じます。(意向)

ただ単にこれらを丁寧表現や例外と見なすことも可能だが、これらは、「もの」の拡張用法と同様、「ので」の用法の拡張として扱うべきで、「から」を使うと主観的な理由を押しつけ、強すぎて、角がたつ場合、客観的な表現である「ので」を使って、自分を殺して、丁寧なソフトな表現にしようとするものである。婉曲表現という点では「ので」は「もので」に近いが、「もので」は予定外、不本意などの個人的な理由を客観化しながら、強調する機会が多く、命令、禁止、勧誘などには使えないのである。

#### 4. 結論

理由、原因を述べる時、以下のような選択が可能だと言えよう。

1) ただ単に条件と結果を結びつける場合や条件が確実性に乏しい時や結果がまだ実現していない時は「から」を用いる。

2) 話し手の主観以前に存在し、コミュニティ共通の知識として存在する条件と結果の関係を表す時に「ので」を用いる。結果に至った理由、原因が事実であり、それが聞き手にも明らかであり、分かってもらえる、又分かってもらいたいという場合に「ので」を使う。又、理由、原因が自分の勝手なものではなく、話者のスピーチコミュニティの習慣に準ずるものだと聞き手に思わせたい時にも用いる。従って丁寧に表現したい時にも用いる。

3) 原因と結果を自分勝手に結び付けたい場合、こうなったのは当然で、避けることが出来なかったのだと相手に分かってもらおうとする時や責任逃れをする時にも「もので」を使う。従って、甘えている感じがする。又、話相手に分かってくれようが、貰えまいが、とにかく自分の意見を通そうとする時にも使う。

---

<sup>1)</sup> Tawa (1974:49)

「から」を使った(19)では、ただ単に話し手が自分自身の考えを述べているため、いささかぶっきらぼうに聞こえるのに対し、「ので」を用いた(20)では、文全体を一つの事態として客観的に把握し、叙述する形をとっており、今日集中出来ない理由、つまり昨夜仕事のために徹夜をしたということが事実であり、それが聞き手にも明らかであるとか、分かって貰えるといったニュアンスを含んでいるため、丁寧に聞こえるのだと思われる。又、「ものだ」を使った(21)では、「私のせいではないんだから、分かってよ」という甘えがうかがわれる。「もので」も「ので」のどちらも客観化するのに使われるのだが、「ので」の「の」は直接認知出来る状態や行動を体言化するのに使われることからしても、「ので」の方は「もので」ほど主情的ではないと言えよう。

(19) 昨夜、仕事で徹夜したから、今日ボーッととしていて...

(20) 昨夜、仕事で徹夜したので、今日ボーッととしていて...

(21) 昨夜、仕事で徹夜したもので、今日ボーッととしていて...

本稿では、話し手の主観性、客観性について論じてきたが、これを対立概念として捉えるのではなく、あくまでも連続する概念として把握するべきである。言うまでもなく、「から」「ので」「もので」の選択条件は、話者の主観性、客観性という文レベルの制約だけではなく、少なくとも、文レベルの焦点要素としての共起関係や、又、談話レベルにおける焦点の有無といったものも加味しなければならない。しかしながら、話し手の主観性、又話し手の希望（つまり聞き手にどう理解してもらいたい）が選択条件上、重要な一因だということは確かなようである。

(ウエイクフォレスト大学)

#### 例文出典

赤川次郎 1984 『真実の瞬間』 新潮社

『外国人のための基本語用例辞典』 1984 文化庁

源氏鶏太 1955 『明日は日曜日』 春陽堂書店

曾野綾子 1988 『失敗という人生はない』 新潮社

Tawa, Wako 1974 On *kara* and *node*. 『日本語教育24』 日本語教育学会 pp.47-56

寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味 第II巻』 くろしお出版

名柄進、中西八重子、広田紀子 1987 『外国人のための日本語例文問題シリーズ2:形式名詞』 荒竹出版

ビートたけし 1991 『だから私は嫌われる』 新潮社

森田良行、松木正恵 1989 『日本語表現文型』 アルク

Miyagawa, Shigeru. 1990 *Kara and node: Extending the study based on phenomenal and structural knowledge*. Paper presented at the Middlebury Conference on Japanese Linguistics and Japanese Language Teaching. Middlebury College, June 16, 1990.

#### 参考文献

揚妻祐樹 1990 「形式的用法の『もの』の構文と意味—〈解説〉の『ものだ』の場合—」 『国語学研究 30』

82-93. 東北大学

- 大野晋 1974 『日本語をさかのぼる』岩波新書
- 此島正年 1973 『国語助詞の研究』桜楓社
- 坪根由香里 1994 「『もの』『こと』『の』に関する考察 --その意義素を求めて--」修士論文、南山大学
- 寺村秀夫 1992 『寺村秀夫論文集I—日本語文法編—』くろしお出版
- 中村秀吉 1975 「もの、こと、事実」『理想：ものごと秋季特集』51-64. 理想社
- 原田登美、小谷博康 1991 「にほんご『もの』と『こと』」『甲南大学紀要文学編84国文学特集』、1-34.
- 籾山洋介 1990 「現代日本語モノ』の諸相」『Litteratura 11』、未公刊修士論文、名古屋大学
- 籾山洋介 1991 「修飾語句を伴わない『モノ』の意味、用法」『名古屋大学言語文化学部言語文化論集 第XIII巻第1号』105-118.
- 籾山洋介 1992 「文末の『モノダ』の多義構造」『名古屋大学言語文化学部言語文化論集 第XIV巻第1号』19-31.
- 森田良行 1980 『基礎日本語2』角川書店
- 森田良行、松木正恵 1989 『日本語表現文型』アルク
- Jorden, Eleanor Harz. 1963 *Beginning Japanese*, Part 1. New Haven, CT: Yale University Press.
- Makino, Seiichi, Tsutsui, Michio 1986 *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times.
- Miyagawa, Shigeru. 1990 "Kara and node: Extending the study based on phenomenal and structural knowledge." Paper presented at the Middlebury Conference on Japanese Linguistics and Japanese Language Teaching. Middlebury College, June 16, 1990.
- Takashi, Kyoko 1994 A Study of the Speaker's Individualistic Spirit Reflected in Japanese: A Case Study of the Japanese Discourse Modal Marker *mono*. *Journal of Asian Pacific Communication*, vol. 5, no. 2, 5-18.